

## 花 火

小林まもる

花火の帰り  
きがかりな生徒に会った  
しばらく学校に来ていない  
声をかけると下を向いたまま  
ななめに向きを変え  
一人で帰っていった

実ることを求めない  
華やいだ瞬間の断続のあいだ  
かれはずっとどこを  
見ていたのだろう

いまは破裂することも  
花開くこともないやみの中  
人声も遠く途絶えて  
太古の風が重く垂れ込め

とぼとぼとあてもなく  
惨めに破裂したいつかの  
自分の影をおいかけ  
いまも今の自分の周りを  
さまよっているのだろうか

